

北相 59

HOKUTOH



岩手大学教育学部同窓会

2020

目 次

表紙絵 「重みがある石垣」

盛岡市立上田中学校

2年 林 由里子

巻頭言

伝統を維持し、前進

教育学部長 遠 藤 孝 夫……1

特 集 全国へ羽ばたく岩手の音楽

音楽に終わりはない

小 川 曜 美……2

私の吹奏楽指導

田 中 克 徳……3

音楽とともに～これまでとこれから～

中 野 美由紀……4

三つの善いこと

柿 沢 香 織……5

桐の葉物語

出会い

小 原 淑……6

「歌うこと、続けること、本物を追い求めること」

田 口 千紗都……7

あきらめないで工夫して努力すること

稻 垣 陽 介……8

回 想

谷 藤 明 子……9

職業人としての自分を強く意識した5週間の教育実習

仁昌寺 真 一……10

津軽の「じょっぱり」

田 中 吉兵衛……11

キャンパス便り

「何をしたいか」

八木橋 寿 海……12

教育への志

川 上 紗 希……12

大学時代を振り返って

三 浦 健……13

「学び続ける教師」

藤 森 崇 浩……13

思い出

高村光太郎の夢

藁 谷 収……14

幼児教育の重要性

大 野 真 男……14

定年を迎えて

遠 藤 匠 俊……15

岩手大学での教員生活を振り返って

土 谷 信 高……15

越境としての30年

塙 野 弘 明……16

価値の逆転

吉 田 等 明……16

事務局便り……17

会計報告……18

北桐会役員一覧……19

編集後記……20

〔巻頭言〕

かんとうげん●



「夢のような学校」の話

教育学部長

遠藤孝夫

第1次世界大戦直後の1919年9月、ドイツ南西地区の主要都市シュツットガルトを一望に見渡すことのできる「ウーラントの丘」に、一つの私立学校が誕生しました。人智学の思想家ルドルフ・シュタイナーと企業家エミール・モルトの主導により創設された「シュタイナー学校」です。シュタイナーは、当時の学校が「精神の機械化、魂の植物化、身体の動物化」をもたらしていると痛烈に批判し、画期的な学校を創設しました。その後、ナチズムの嵐の中でこの学校は閉鎖を余儀なくされますが、ドイツ敗戦後にシュタイナーの教育理念を継承する人々の手で再建され、今日に至っています。幸運なことに、昨年シュツットガルトを訪れ、創立100周年記念イベントに参加する機会に恵まれました。

まずは、シュタイナー学校について簡単に説明させていただきます。この学校は、一般的な学校とは大きく異なります。あらゆる差別・選別・競争が排除されています。学校形態としては12年制の初等・中等学校で、この間に留年や選別はありません。管理職（校長）は置かれず、全教職員の合議制と父母の参画によって学校が運営されます。また、「自分で考え、かつ実行できる人間」（自由な人間）の育成が教育目的に据えられ、12年間を通して、手工芸科目や芸術科目、農業実習まで含めた全生徒共通の総合的カリキュラムが編成されています。教育内容と教育方法は、徹底した子ども理解に基づいて設定され、あらゆる授業が「芸術体験」として構成されます。「死んだ知識」の集積物としての教科書とその暗記の程度を測定するテストも全廃されています。文字通り「夢のような学校」なのです。

北桐会の皆様の多くは、こんな型破りな学校で「大学に進学できるのか」と疑問を抱かれたことでしょう。しかし、大学進学率は非常に高く、卒業生の中にはノーベル医学賞（2013年）に輝いた研究者もいます。現在は世

界各国に設立され、学校数も全世界で1千校（ドイツ国内に約240校）を数えます。残念なことに、現時点の日本においては、まだ数校（大半はNPO法人）のみにとどまっています。

さて、100周年記念式典の様子を紹介しましょう。100歳になった「ウーラント丘校」の生徒達のオーケストラによる厳かな演奏で式典は開幕しました。続いて同校で現在学んでいる生徒達が、自身の母国語で、世界中から駆けつけた2千人を超す参加者に歓迎の挨拶を行いました。なんと23言語でした。もちろん日本語の挨拶もありました。6人の来賓（バーデン・ヴュルテンベルク州首相、シュツットガルト市長も）が、学校創設の意義や特質などについて、熱が籠った祝辞を述べました。アトラクションは、ドイツから遠く離れた国（ナミビア）のシュタイナー学校の生徒達による素晴らしい競演でした。日本からは、京田辺（NPO法人）の生徒達が、凛とした和太鼓演奏を行いました。アフリカのナミビアからは、太鼓のリズムに合わせた迫力ある歌と踊りの発表でした。式典の終盤、妖精に扮したシュタイナー幼稚園の園児たちが両手に花を携えて入場し、参加者一人ひとりに配りました。フィナーレは、再び登場したナミビアの生徒たちです。ホール全体が揺れるほどの拍手と歓声に包まれ、大きな感動とともに記念式典は終了しました。午後には、近隣の6つのシュタイナー学校（1校は特別支援学校）の生徒たちによる学習成果の披露がありました。ステージ上で発表する生徒達とステージ下で指示を出しながら見守る先生が、結ぶ強い信頼関係で結ばれている様子に心打たれました。

この4月から新学習指導要領が全面実施となります。多くの会員の方々には多忙を極める日々が待ち構えています。そんな時だからこそ、肩の力を抜いて、「夢のような学校」に思いを馳せてみることも、必要なのではないかと思われるのです。

[特集]

全国へ羽ばたく岩手の音楽



音楽に終わりはない

岩手大学教育学部附属小学校

小川 晓美

歴史と伝統ある岩手大学教育学部附属小学校（以下附小）の合唱部担当になるなど、大学時代の自分には全く想像できないことであった。音楽科の同級生や先輩、後輩たちの豊かな才能を目の当たりにして、できないことがありすぎて泣きたくなつたことは数えきれない。

「できなくて当たり前。泣く暇があったら練習しろ」がモットーの愛情深い佐々木研究室で、答えは自分で見つけるのだと叩き込まれ、大学と一般の合唱団に所属し、歌う時間をとにかく増やし、練習した。そうして自分やまわりは心が強くなり、育ててもらえたと深く感謝している。研究室の同窓生は、誰かが困っていると一緒に練習し、大切なことは何か共に考える仲間になった。その仲間は今でも私のまわりにいて、大きな力をくれる。

附小合唱部は、H 8年 NHK 全国学校音楽コンクール（以下Nコン）に県初の全国大会出場、H 23年には15年ぶりの全国出場を果たしていた。H 24に着任したとき、「受賞のプレッシャーはものすごいでしょう」といろいろな方に言われたが、賞のことは気にならなかった。

附属小学校は岩手の音楽を牽引する役割がある、人の真似をするのではだめだと小原一穂先生に教えられた。音楽に終わりはない、子供の力は無限大なのだからしっかり指導しないと、佐々木正利元校長に励された。以来、よりよい音楽をめざして模索の毎日であるが、歌が大好き！と瞳と声をキラキラさせて練習に臨む子供たちと一緒に合唱できることはとても楽しい。

どの学校でも子供たちと必死に音楽づくりをすることは変わらない。分かることを精一杯教え、子供たちが自信をもって歌えるようにしよう、特別な時間だけでなく、授業で音楽の力を高めようと努めてきた。子供は、音楽的反応が速い。私が気付くことを説明すると、きちんと理解し、変化する。こちらがつまらない音楽をすると、途端につまらなく歌う。つまり、気付く力がなくなつたら終わりなのだ。勉強していないと、自信をもって子供の前に立つことはできない。声楽レッスンを受けると、自分の弱さも強みもわかる。子供の悩みにも、寄り添える。

大学在学中から今まで合唱をしてきて、ヘルムート・ヴィンシャーマンやクルト・マズア、ペーター・シュライナー、ダヴィット・ティム、山田和樹など、世界的指揮者のタクトで演奏する

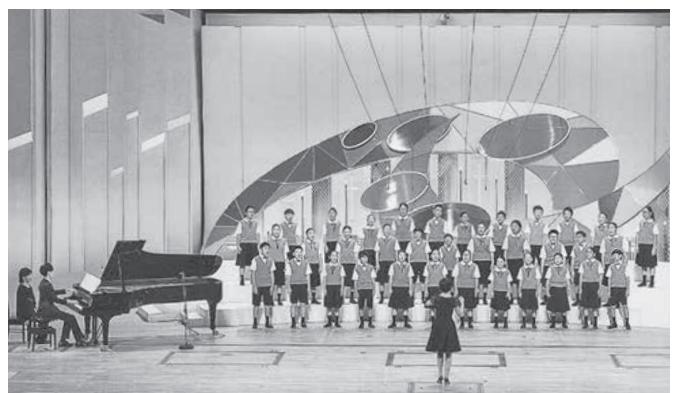
機会を得た。指導の一言、棒の一振り、立ち姿、表情で、伝えたい音楽がわかる。このような方々も追求し続けている音楽。音楽に終わりはない。

Nコン東北ブロックで唯一の金賞をいただくことは奇跡に近かったが、H 24年から令和元年までに全国大会に6回出場、H 25年には銀賞（全国2位）、H 27年は銅賞（全国3位）を受賞した。こども音楽コンクールでも全国3位にあたる賞を頂いた。快挙といってよい。受賞は確かに、大きな励みとなる。

しかし、競争することは音楽の本質ではない。コンクールは目標の一つであり、活動の一部にすぎない。校内の音楽集会やPTA主催の若竹コンサート、施設訪問や芸術祭参加、仙台フィルや山形交響楽団・盛岡の市民合唱団との共演など、附小の歌声は地域に求められ、好評を博している。子供たちの歌声は、人を惹きつける魅力がある。その魅力は、保護者と教職員の強力なバックアップと子供たちの不断の努力、そして彼らの、ステージでより一層輝きを放つ力から生まれている。

子供の可能性は無限大。音楽に終わりはない。子供たちは考えることが大好きだし、いつも前へ、前へと進んでいこうとする。これからもよりよい音楽をめざし、演奏を楽しんでいきたい。

（平成3年 小学校教員養成課程 音楽科 卒業）



第86回 NHK 全国学校音楽コンクール 全国コンクール



私の吹奏楽指導

矢巾町立煙山小学校

田 中 克 徳

2019年度。煙山小学校吹奏楽部は、とうとう東北大会を突破することが出来ました。ここ3年、東北大会では悔しい思いをしていました。特にここ2年間は、あと一步のところで通過出来ず…今年、やっとその壁を突破し、夢の東日本大会（小学校の部の事実上の全国大会）に出席することが出来ました。金沢で行われた東日本大会では、まさかの金賞を受賞することが出来、部員一同本当に感激しました。

今年の6年生は、本当に一生懸命頑張る子達で、先輩達の「来年こそ、全国に行ってね。」という願いをかなえるべく、本気で練習してきた子供達でした。吹奏楽が大好き、仲間が大好きという面でも、思いが人一倍強い学年だったと思います。

練習には本当に一生懸命取り組みましたが、叱責（気合い入れ）→特訓（猛練習）という練習ではなかったと自負しています。笑い満載の日もたくさんあり、練習をご覧になったら「これが、全国に行く学校なの？」とびっくりされるかもしれません。いざというときは集中するけど、楽しいときは本当に楽しんで練習してきました。

それぞれの大会に向けて逆カレンダーを作ったのですが、部長がこんなことを書いていました。「今日が本番！思いを届けよう。先生に！仲間に！お客様に！」なんと、コンクールの賞を決定づける「審査員に」という言葉がなかったんですね。私は、ここに感動しました。また、金沢での東日本大会。子供達が涙したのは、本番直後にすぐに拍手が来たときでした。全員が起立したときは、子供達はもう涙が止まらなくて。ステージ上で涙を拭きながら拍手を浴びていました。その後、写真撮影の

場所に行くときも、抱き合って大泣きしながら喜びあっていました。まだ、賞は発表されていないのに…それを見たとき、「ああ、この子達の本当の願いは、良い賞をもらうことじゃないんだ。お客様に喜んでもらえること。感動してもらえること。仲間と演奏出来る喜び。そこを一番大切にしているんだ。」そう思いました。そこに感動して、私も子供達とともに号泣てしまいました。

私は、学生時代、オーケストラに所属していました。コンクールもないサークルでしたが、プロの指揮者や指導者を迎えて、本物の音楽に感動しながら活動していたことを思い出します。音楽の新しい発見に感動しながら、本当に楽しみながら活動していました。この「音楽が大好き」という気持ちが、今も私の指導の原点なのだと思います。音楽大好き、仲間大好きという今の子供達と一緒に活動出来ることが、本当に大きな喜びです。

（昭和58年 小学校教員養成課程 社会科 卒業）



（株）フォトライフ提供

[特集]



音楽とともに～これまでとこれから～

北上市立黒沢尻北小学校 指導教諭

中野 美由紀

そもそも私が教師という仕事を意識したのは中学の時でしたが、その時は特に強い思い入れはありませんでした。高校生になり、何をやりたいというものもないまま大学受験を終え、初めて本当にこれでいいのかと考えました。悩む私に母が、中学時代の恩師に相談してみたらと声をかけました。電話の向こうで先生は「悩んでいるのか。教師はいいぞ。」とおっしゃいました。私はその一言に押され、大学4年間を教育学部で過ごしました。

初任校の江釣子小学校には、音楽の好きな先生がいらっしゃり、私は合唱クラブの伴奏を任せられました。厳しい先生でしたが、その先生が音楽を指導されると子供達が輝くようでした。翌年その先生が転勤され、私は合唱クラブの主担当になりました。江釣子小学校の6年間にいろいろな講習会にでかけました。私は合唱の経験がなかったので、そこでの学びは新鮮で楽しいものでした。一度東北大会にも出場しました。そこで味わった緊張感が、その後の音楽を続けていくきっかけになったのかもしれません。

次に赴任した黒沢尻東小では、8年の在任中5年間音楽専科をやらせていただきました。音楽の免許のない私にそのような機会を与えてくださった当時の校長先生から、「一つの事をしっかり頑張りなさい」とご指導していただきました。黒東小でも合唱クラブを担当し、コンクールに参加しました。東北大会で入賞できるようになった時にある先生から「東北大会で入賞することは全国レベルにいるということである」とお手紙をいただきました。この言葉はとても励みになりました。

3校目は二戸市立石切所小学校です。石切所小には合唱部はありません。最初はそれがとても残念でしたが、それを考える暇がないほど音楽活動は盛んで、音楽に全力で取り組む子供や保護者の皆さんがありました。石切所小にはマーチングバンドがあり、全国を目指して練習していました。真摯に練習に取り組む子供の姿は衝撃的でした。先生方も素晴らしい方ばかりで、マーチングをチームで支えていました。ご存じの通り、マーチングは演奏の技術はもちろんですが、体全体で音楽を表現するものです。音とリズムと表現が一体となるように、何度も何度も繰り返し練習しました。全国大会への夢はかなわず、東北大会金賞が最高の賞でしたが、子供達と流した悔し涙と共に、私にとってはなくてはならない5年間となりました。

現任校である黒沢尻北小学校も音楽活動が盛んで、合唱部

と吹奏楽部が音楽部として学校の特色の一つとなり活動しています。今年度、合唱部は全日本合唱コンクールに新設された小学校部門で全国大会に出場し、最高賞となる理事長賞を受賞しました。全国大会への出場は4度目でしたが、このような大きな賞はもちろん入賞も初めてのことでしたので、本当に驚きました。全国大会への初出場は黒北小に赴任して9年目でした。黒東小時代に「東北での入賞は全国レベル」といつていただいたことを励みにしながらも、その道は遠く、全国大会は上手さだけではない何かが必要なのではないか、と考えていました。人を引き付ける何か。初出場できた時の子供達は「強さ」があったような気がします。今年度の子供達は、強さはないけれど「素直さ」があります。今回の全国大会に向けて、ラストの一週間の子供達の成長は今までに経験したことのないものでした。「自分以外の誰かの幸せを、心から願い歌うこと」を、一人一人が本番の舞台で素直に表現できたと思います。

今、コンクールを終え、この受賞を多くの方に喜んでいただき大変嬉しく思うと同時に、大きな責任を感じています。しかし、音楽を通してたくさんの人と出会い、多くの学びを得て日々子供達と活動できる今の環境には、感謝しかありません。「教師はいいぞ。」と教えてくださった恩師の言葉を胸に、これからもこれまでと同様に歩んでいきたいと思います。

(平成元年 中学校教員養成課程 家政科 卒業)



活動風景



三つの善いこと

北上市立上野中学校

柿 沢 香 織

「東北代表 北上市立上野中学校 ゴールド金賞」

既に勝敗のついているスポーツの閉会式とは異なり、吹奏楽コンクールの閉会式は一種独特な雰囲気と緊張感に包まれる。各校の熱演の後、客席は結果を待つ生徒・保護者・吹奏楽ファンなどが、発表を今か今かと待ち続け、熱気というべきか混沌というべきか、何回体験しても一言では言い表すことのできない不思議な空間となる。

このような場で、最高の賞である金賞を告げられた平成30年度。私たちの感情は一気に溢れ出し、歓喜というより絶叫が会場に響き渡る。「岩手の子供たちだってやればできるんだ！」心の底から込み上げてくるその熱い想いとともに、費やした月日・時間や今までの様々な出来事、支えて頂いたたくさんの方々や導いてくださった諸先輩方の想いなどが混ざり合い、感情が一気に噴き出したあの日のことは、今でも鮮明に思い出すことが出来る。北桐への執筆依頼にあたり、かなりの驚きであったが、今までご指導下さった皆様に感謝の気持ちをお伝えするとともに、吹奏楽について少しでもお伝え出来ればと思い、拙い文章ではありますが述べさせて頂きます。



【H30.10.20 第66回全日本吹奏楽コンクールにて】

吹奏楽連盟発行の記念誌によると、岩手における吹奏楽は昭和30年代から活発化し始めた（ようである）。現在は小学校から一般まで226もの団体が、コンクールだけでなく団体独自の演奏会など、幅広い活動をとおして社会の中で吹奏楽が深く愛されるよう、また音楽から元気と感動をもらい、それを聴き手と奏者が共有し合えることを目指し、各々で日々活動に取り組んでいる。岩手はその面積の広さから他地区と交流することは難しいものの、各地区内での合同演奏会や講習会・交流は多く、切磋琢磨する環境ができつつある（ように感じる）。学校においては少子化による部員数減少や予算削減、ガイドライン等による活動制

限等、難しい問題が山積し続けている。しかし、だからこそ諸先輩方が積み上げて下さった努力と経験と知恵を踏まえ、岩手の吹奏楽の灯が更に明るくなるよう、教員として今できる最大限のことを…と考え励む毎日である。現在勤務する上野中は、黒沢尻北小一校からの入学で、経験者の他に初心者も半数ほど入部する。校長をはじめ職員の理解も深い上に、市全体の交流や連携・支援も多く、真っ直ぐ目標に向かう生徒達とともに、恵まれた環境のもと日々助けられながら、音楽に向かわせて頂いている。全国出場は、こうした周囲の支えと諸先輩方の積み重ねがあったからこそそのものであり、自分達だけでは到底成し遂げられない、言わば『チーム岩手』によるものだと思っている。今後は、この感謝の気持ちを演奏で恩（音）返しできるよう、そして吹奏楽（音楽）のバトンを次世代へ確実に引き継げるよう、音楽好きの種を蒔き続けていかなければと思う。

最後に。以前、作曲家の三善晃先生が岩手にいらした際、講演会で『三つの善いこと』と題して提言して下さったことが現在の私の指標となっているので、ご紹介する。

- ①吹奏楽という枠にとらわれず、固有性を高めること。
- ②固有性を高めるヒントは困難に遭遇した時に得られる。生徒と共に悩み解決を目指す時間を共有し味わうことで、周囲から認められる固有性を作り出せる。
- ③もっと外に吹奏楽の素晴らしさやエネルギーを伝えること。

音楽を生み出していく過程は、決して楽なものではなく、気が遠くなるような試練も待ち受けている。しかし今後も生徒と共に悩みながら、聴き手も奏者も感動を共有し合える演奏、そして吹奏楽（音楽）の素晴らしさやエネルギーで社会を明るくする、そんな演奏を目指し音楽を続けていきたい。

（平成3年 中学校教員養成課程 音楽科 卒業）



〔桐の葉物語〕



出 会 い

小 原 淑

私が教員になってから、もうすぐ2年目が終わろうとしています。昨年度は2年生、今年度は1年生を担任し、毎日子どもたちのきらきらした顔を見ながら働いています。今回執筆の機会をいただき、改めて学生生活を振り返ってみると、大学時代の学びや出会いに今の私が支えられていると感じました。

今はくなってしましましたが、私が所属していた教育実践学サブコースでの学びは、とても楽しく充実したものでした。特に子どもを指導するときや保護者と話すときに、「どのように話せば相手が安心できるか。」を学んだことは、現場に出た今、子どもや保護者と関わる際の基盤になっています。そして、子どもの特性を大切にしながら、保護者との共通理解のもと、子どもを見守ることにつながっていると思います。

また、立花先生から算数の授業で指導するときの要点や考え方について詳しく学んだことは、全教科における教材研究と指導法の工夫につながっています。中でも、授業の映像を見たり、学生相手に算数の授業を実際にしたりする講義で、どのように授業をつくるかを考えて実際に指導案を書いたり、授業の良い点や改善点を話し合ったりすることは、とても難しかったのですが、大変勉強になりました。

教員採用試験に向けて、立花先生は勉強会を開いたり面接練習を毎日行ったりしてくださいました。また、サブコースの仲間とは、演習室で参考書や過去の問題集から問題を出し合って勉強しました。このように、恵まれた環境の中にあったからこそ、私は頑張ることができたと思っています。私にわからないところがあると、丁寧に教えてくださった先生とサブコースの仲間には、大変感謝しています。

大学の講義の中で特に印象に残っているのは「いわての復興教育」です。東日本大震災の時、私は盛岡に住んでいたので、沿岸部の被害の様子はテレビの映像を通して知るだけでした。そのような私はこの講義で、「学校が地域の避難所になり、教員は公務員としてその運営を

していかなければならないこと」「津波等の震災に備えて、普段から高台に避難する訓練をすること」等、教育公務員の立場から改めてあの大震災について考えることができました。今後も様々な自然災害が起るかもしれません。その時に向けて、子どもを守るために私自身がどのように行動するか、日頃からどのようなイメージをもって避難訓練をするか、地域の避難所としてどう動くか等、考えることができた講義でした。

講義ではありませんが、子どもと接する機会が少ない中、零石小学校や仁王小学校、岩泉の夏休みの学習支援に参加し、子どもとたくさん関わることができたこともとてもいい経験でした。子どもにわかる言葉で、理解できるように教えることは難しいと感じました。同時にわかった子どもの顔を見ると、教えがいがあるなとも思いました。そして、私は子どもと関わることが本当に好きだなとも思いました。色々な子どもと関わることができ、実態を知ることのできる貴重な機会でした。

「小学校の教員になりたい。」そう思って学生生活が始まり、たくさんの素敵な仲間や先生方と出会えたおかげで、私は夢を叶えることができました。今も学生時代に実習や学習支援、教員採用試験と一緒に頑張った仲間と度々会い、仕事のことについて、色々話し合っています。また、立花先生の算数の勉強会にも参加し、たくさん学ばせていただいています。ずっと学ばせていただける先生、支え合える仲間と大学で出会えたことは、一生の財産です。

現在、私は黒沢尻西小学校に勤めています。ここでも大学時代と同じようにたくさんの素晴らしい先生方と出会えました。先生方に指導していただき、助けていただきながら、子どもたちと学校生活を送っています。これからまだまだ続く長い教員人生、子どもたちに「出会えてよかった。」と思われるような教師になりたいです。

(平成30年 学校教育教員養成課程 学校教育コース
教育実践学サブコース 卒業)



「歌うこと、続けること、 本物を追い求めること」

田 口 千紗都

「私が生涯やり続けるものは歌だ。死ぬまで歌を続けるんだ。」と思ったのは大学何年生の時だっただろうか。

私が「一生これを続けたい！」というものに辿り着いたのは、そう、大学生になってからだった。音楽が好き、ピアノが好き。幼い頃はただそれだけで、将来何になりたいかなんて明確ではなかった。進路を決める時、もっと音楽の専門的な勉強がしたい、教育の勉強もしたい、ということから岩手大学教育学部を目指すことにした。受験真っただ中の高校3年生。友人たちが二次試験に向けて勉強、勉強、の毎日の中、私は音楽室で、自宅で、ピアノを弾きまくる毎日だった。

そして4月。晴れて大学生となった。(合格発表の時、テレビに映るのは嫌と言って時間をずらして見に行ったのに、取材されたのは忘れられない。) 音楽科のある3号館は、良く言えば森の中にひっそり佇む、悪く言えばうるさいから外れに追いやられた場所、つまり教育学部の中でも目立たない端っこに位置している。(その位置は今も変わらないが、新しく生まれ変わった3号館を見ると、現在の学生が羨ましいような気もする。) 当時は芸術文化課程音楽コースが新設されたばかり。先生方にも先輩方にもたくさんの同級生にも恵まれた、良い環境の中で学部の4年間、大学院の2年間を過ごすことができた。

そんな中で、ピアノ一辺倒だった私が「声楽」と出会えたことは本当に本当に大きな出来事だった。岩手大学に進学しなければ、佐々木正利先生に出会わなければ、先輩方に出会わなければ、私はこの道に進んでいなかっただろう。そう考えるととても不思議な縁を感じる。正利先生は、「どこにいても本物の音楽はできる。都会でなければできないということはない。岩手から本物の音楽を発信するのだ。」ということを常々仰っていた。そのおかげで、大学生活の中で何度も「本物」の音楽に触れる瞬間を味わわせて頂いた。先生と出会わなければ、歌の本当の素晴らしさも、苦しさも厳しさも、それを乗り越えて味わう達成感も感じることはできなかっただろうし、それを子どもたちに伝えることはできなかっただと思う。そして私は今

も仕事をしながら音楽を続けている。

それは同じように教員となった先輩方の、音楽に真剣に向かいながら仕事と両立している姿を見せてもらっているからだろう。「音楽を教える者が音楽の勉強をせずに音楽を教えることはない。いつでもフレッシュな音楽の中に身を置くべき」を実践している先輩方は私の道しるべであり、目指すべき姿である。(未だに未熟者と先輩に叱られる日々ではあるが…。)

教員になり11年。たくさんの先生方、生徒、保護者との出会いがあった。音楽の教員になった時、大学時代にピアノと声楽のレッスンをしっかりと受け続けて本当に良かった、と何度も思った。歌が歌えなくても、ピアノが弾けなくても、音楽の先生になれるかもしれない。でも、弾けないよりは弾けた方がいいし、歌えないよりは歌えた方がいい。僻地の学校に勤務した時、ピアノを弾ける生徒はほほいなかった。多い時は1日に10曲近く弾いた。CDで歌うことに対する抵抗があり本物の音にこだわった。あの6年間がなければ対応できなかっただと思う。歌うよさや楽しさは、自分が歌って示すこと、声を通して伝えることにあると思い、たくさん歌った。子どもたちと一緒につくる合唱は本当に楽しかった。合唱をやってきて良かった、と思う瞬間が何度もあった。初任教校の副校長先生からは、「道徳は音楽と同じ」と教わった。新たな発見であった。本当にそうだと実感したのは7年目を過ぎたころからだっただろうか。上田中学校勤務時代は道徳潰けの日々だった。最後に持った学年の子どもたちとの合言葉が「ふんぱりなさいよ」になったことは今でも忘れない。

そんな目まぐるしい日々の中でふと思い出すことがある。大学入試の面接で、「コンサートホールで演奏を聴くことができない子どもたちはたくさんいる。そんな地方の子どもたちに生の音楽を届けたい。」と話したことを。今からもう20年近く前の話である。今の私に聞く。「あの頃思い描いたことは実現できていますか。」と。

(平成17年 教育学部芸術文化課程 音楽コース 卒業)



あきらめないで工夫して努力すること

稻垣 陽介

現在私は、岩手県久慈市で中学校の教員をしています。久慈市には小規模の学校が多いのですが、生徒数は少なくとも、「目標を高く掲げ、工夫しながら努力し続けることで、生徒たちは大きく成長し、成果を上げることができる」ということを子どもたちから学ばせてもらっています。前任校は全校生徒が40人の小規模校でした。全校で陸上に力を入れており、2014年には、毎年4月に盛岡市で行われる「盛岡市内一周継走大会」で、見事に大会新記録を樹立して初優勝を成し遂げました。この経験から、生徒たちは誰でも無限の可能性を秘めており、それを上手に引き出すことができればどんなに高い目標でも達成することができるということを学びました。

私が子どもに努力することの大切さを教えてもらった印象深い出来事があります。岩手大学在学中、仁王小学校での教育実習で、ある5年生の児童と出会いました。その子はとても人懐っこくて、出会ったばかりの私に、「何かわからないことがあつたら、何でも聞いてね」と言ってくれました。私はとても嬉しく、緊張と不安が一気に吹き飛びました。その子はとても明るく、学級の中でもムードメーカー的な存在でした。いつでも周りには友達が集まり、毎日楽しそうに遊んでいました。私も休み時間には子供たちと校庭に行き、鬼ごっこやドッヂボールをしました。ある日、昼休みに鬼ごっこをして楽しく遊んでいたとき、「鉄棒しようよ」と仲間たちが鉄棒の方に走っていきました。すると、その子から今までの笑顔が消え、下を向き始めました。その後も様子を見ていましたが、友達が遊んでいる鉄棒の方に来る様子はありませんでした。心配になった私は、その子に声をかけました。「どうしたの、大丈夫?」すると、その子の目から大粒の涙がこぼれました。話を聞いていくと、小さい頃から鉄棒が苦手で、鉄棒は嫌いだからやりたくないとのことでした。しかし、その涙を見ていて私は思いました。この子は、鉄棒をやりたくないのではなく、本当は、鉄棒ができるようになりたいのではないかと。その出来事を担任の先生に伝え、その日の放課後に、その子と改

めて話をする時間をもらいました。楽しい会話をしながら、いよいよ本題へ。すると、昼間と同じように、涙ながらに語りだしました。そして、「鉄棒ができるようになりたい」と私の目を見て力強く言ってくれました。私はその真剣な目を見て、熱くこみ上げるものがありました。「よし、鉄棒ができるように一緒に練習しよう!」それから毎日、朝の時間や昼休みなど時間があれば一緒に校庭に行き、鉄棒の練習に励みました。その子は本当に鉄棒が苦手で、前回りもできたりできなかったりという状況でしたが、二人で決めた目標は「逆上がりができるようになる」という高い目標でした。二人で学校の図書室へ行って、「鉄棒がうまくなるための本」を借りたり、私自身も担任の先生や体育担当の先生からその子に伝えるポイントを教えてもらったりしました。そして、二人で最も大切にしたのが、練習中どんなにできなくても「絶対にあきらめないでやり続ける」ということでした。それから約2週間、毎日練習を重ねました。前回りはもう十分にできるようになりましたが、なかなか逆上がりができませんでした。それでも、周りで応援してくれる仲間たちの声もあり、その子も最後まで頑張りました。そして、「絶対にあきらめない」と二人で大きな声を出して挑戦した逆上がりで、その子は、生まれて初めて一人で逆上がりを成功させました。成功させたときのその子の表情や周りで応援してくれていた仲間たちの歓声に、私自身が一番興奮していました。私とその子はお互いに駆け寄り、ギュッターハグをしました。「本当に頑張ったね。」「先生、本当にありがとう!」

私にとって、この経験は本当にかけがえのないものであり、今でも、この児童から教えてもらったことを大切にしています。そしてこれからも生徒たちに、高い目標をもち、日々工夫しながら努力し続けることの大切さを伝え続けていきたいと思います。

(平成13年 小学校教員養成課程 理科 卒業)



回 想

谷 藤 明 子

2年程前の夏のことである。あまりに暑い日だったので、涼をとるために喫茶店に入った。盛岡の古い町家を使って営まれている味のある喫茶店である。そこで注文を取りに来た店の女性から「○○先生（旧姓）じゃないですか。」と声をかけられた。担任した子どもや保護者の方から声をかけていただくことはあるが、その方は少し違った。

先日、「北桐」の編集委員長さんから、大学時代を振り返って原稿を書いてほしいというお電話をいただいた。優柔不断にも引き受けてしまい、困った。ここに書かせていただくような価値のあるできごとがあつただろうか。

私の大学時代。貴重な4年間をまったく「しょうもなく」過ごしてしまった。授業はサボれるだけサボり、目的もなく、ぶらっぷらして無為に過ごした。不遜なことにその頃はまだ、自分の求めるものが、大学の中にあるようには思えなかった。教育学部教育学科に所属していたが、教職に就くかどうかさえもはっきりとは決めていなかった。

何か一つくらい、大学時代に熱く取り組んだものはないのか。必死で思い出してみた。すると、一つだけあった。このぶらっぷら人間が、大学時代に唯一真剣に取り組んだものが。教育実習である。

岩手大学附属小学校4年ほし組が私の配属された学級であった。1クラスに5～6人くらい「教生」が配属されたと記憶している。

1つの授業の指導案を作成するために、同じ学級に配属された教生たちで夜遅くまで話し合った。やっと作った指導案で、いざ授業をしてみると、発問が子どもたちにうまく伝わらない、時間内に授業が取まらない。どんな発問をすれば子どもたちに伝わったのか、時間内に収めるために何が余計だったのか。授業後も教生たちで熱

く話し合った。たった1時間の授業をするために、こんなにも時間と労力がかかるものかと茫然とした。一方で、授業を組み立てる難しさ、奥深さ、面白さに出会った。出合ってしまった。

教育実習を経験して、教職に就きたい…というより、「授業をする人になりたい」という目標らしきものがやっとできた。教育学部なのだから当たり前のことであるが、教育方法、教育心理学、教育評価等々、授業をするために学ぶべきものは、大学の中にしっかりとあったのである。が、気付いた頃には時既に遅し、大学時代のゴールが迫っていた。

大学を卒業し、教職に就いてから、30年以上が経った。もう担任はしていない。岩手県で一番北にある完全複式の小規模校に勤めている。朝と帰りに子どもたちみんなが、職員室に来て「おはようございます」と「さようなら」のあいさつをしてくれるようなどかな小学校である。有難いことに、複式解消のため、週11時間、理科と算数の授業を担当させていただいている。そして、いまだに子どもたちの思わぬ反応に驚いたり喜んだりしている。ときには、授業を担当していない学級にも入って授業を見させていただく。見ているだけでは物足りず、授業に参加してしまう。担任にとっては甚だ迷惑なことかもしれないが…。要は、相変わらず授業をすることが好きなのだ。

冒頭の声をかけてくださった喫茶店の女性であるが、聞けば、私が教育実習で配属された4年ほし組の児童だった方であった。名前を伺って、当時の顔が鮮明に蘇ってきた。私たち教生の拙い発問に何とか応えようしてくれるような利発な子であった。話しているうちに感謝の気持ちでいっぱいになった。30年以上も前の教生のことをよく覚えていてくれたものである。

(昭和61年 小学校教員養成課程 教育学科 卒業)



職業人としての自分を強く意識した 5週間の教育実習

仁昌寺 真一

私は、この3月をもって38年間の教職人生を終える。とても早いものである。今、勤めている学校は、岩手大学教育学部の教育実習校でもあり、毎年、2学期早々、学生と共に、充実した4週間を過ごさせていただいた。実に幸せなことである。

私自身、大学時代の忘れられない思い出の一つが、「5週間の教育実習」である。なぜ、忘れられないのか。それほど中身の濃い充実した日々だったからである。「教師」という職業との鮮烈な出会いがあったからである。そして、自分の人生の大きな分岐点にもなった教育実習。大きく心が揺れ動き、忘れ得ぬ教育実習になった具体的理由は下記の三つである。

一つ目。教育実習では、『「自分」という人間を、包み隠さず、さらけ出さなければ、何も始まらなかった』からである。覚悟を決めなければならなかったからである。

「子どもを理解するために、子ども一人一人をどう見取っていくか。」「授業のねらいを達成させるために、どんな学習活動を仕組んでいくか。」「そのために、どんな発問、どんな資料が必要か。」等々…。『分かる授業のために、よりよい学校生活のために、自分自身が、何を、どのように指導するのか。』等々、どう行動に移すか、その意思決定が常に問われた。主体的な行動が必要不可欠な毎日であった。

それまでの学生生活は、どちらかというと受身的であり、自分自身を強く前に押し出す場面はあまりなかった。前に出ようともしなかった。自分自身の意思決定が迫られたとき、そこにどんな自分がいるのか、主体的行動が不可欠なとき、そこにどんな自分が存在するのか、新たな自分理解の毎日でもあった。

そんな5週間だったから忘れないのだろう。

二つ目。教育実習では、『子どもたちにとって二度と帰ってこない、貴重な一時間の授業を預けていただいている』からである。責任重大だからである。

子どもたちの真剣な眼差しは、学校教育、授業、教師への大きな期待の表れである。「真剣な眼差しに応える授業をしたい。」そう思い、教材研究、指導略案の作成、資料づくり等にあたるが、時間がいくらあっても足りない。時計を見ると…。翌日、意気込んで授業に臨むが、見事に打ち砕かれる。

それでも次の日になると、子どもたちは、目を輝かせて登校し、授業に臨む。また打ち砕かれる。その連続であった。自分の力のなさを実感する毎日であった。

授業は生き物だと思った。同じ単元でも、担任の先生が指導すると、まるで子どもの姿は違う。プロの先生ではないのだから、うまくいくはずはないのだが、何とかして「分かった。」「できた。」喜びに満ち溢れた子どもの笑顔を引き出したかった。見たかった。そんな5週間だったから忘れないのだろう。

三つ目。『教師という職業の素晴らしさと厳しさを実感し、職業人としての自分を強く意識した』からである。

うまくいかなかった方が圧倒的に多く、打ちのめされた5週間の教育実習であったが、実習でできなかったこと、叶わなかったことを実現したいという気持ちが強くなった。未知の世界である「教師」という職業に就きたいと心から思うようになった。将来の職業を強く意識することにつながった教育実習だったからこそ、忘れないのだろう。

まもなく38年の教職人生が終わろうとしている。まだまだやりたいことは数多くあるが、目の前の子どもたちから多くのことを学び、教えられ、子どもと共に成長してきた38年間であった。教師という職業を選び、突き進んできたことに悔いはない。

今年も教育実習生が本校を訪れた。

- ・20歳、21歳という年齢を忘れ、髪を振り乱して遊び、一人一人の子どもと向き合っている学生
- ・「こんな授業にしたい。」と子ども一人一人の顔や姿を思い浮かべ、想いをもって教材研究に打ち込む学生
- ・実地授業の後、研究会等でどんな厳しい指導を受けても、顔を上げて、前を見据え、子どもたちと笑顔で向き合う学生

そんな学生、実習生から、多くのことを学ばせていただいた。実にありがたいことである。未来の創り手、担い手である子どもを教え、育む教師、子どもと共に成長できる教師は、誇りに思える素晴らしい職業である。多くの学生に挑んでほしいと心から願っている。

(昭和57年 小学校教員養成課程 卒業)



津軽の「じょっぱり」

田 中 吉兵衛

津軽から出てきた「じょっぱり」（頑固者、意地っ張り）が最初にじょっぱったのが、東京から入学した同級生に「津軽弁訛りで言っていることが分からないぞ」と言われたとき。「おまえだって東京弁訛りあるべ。わかりにくいくぞ」でした。訛りを治すより話しの内容でわかってもらった方がいいと思い、教養書、哲学書、随筆などを乱読した。

2年生のとき、「東大全共闘」「日大全共闘」に象徴される学生運動が全国の大学に広がり、東大では安田講堂が占拠された。読む本の中に学生運動に関するものも混じってきた。岩手大学にも全闘連という運動体ができ、その後「学生部長の学長室軟禁・教養部新館封鎖・工学部正門前国道封鎖」（「岩手大学教育学部同窓会50年の歩み」から）があり、教育学部の玄関付近では「ハンガーストライキ」も行われていた。大学の存在意義や授業の在り方、権威・権力への対峙についてなどを議論した。より多くの本を読み、じょっぱった記憶がある。

2年生の終わりに専門課程のコース（物理、化学、生物、地学）を決めるとき、地学を希望した。地学研究室の担当教授から「地学はこれまで甲二類（小学校課程）の学生だけで、甲一類（中学校課程）で希望したのは君が初めてだぞ、いいのか」と言わされた。理由は簡単で、あまり希望者がいないのなら自分が行けばコース決めがスムーズにでき面倒くさくなるからだった。どこか偏屈なじょっぱりであったかな。

地学を専攻することでその後の学生生活、教員生活で思いもかけない経験をした。3年生のとき研究室の教授から「隣町の高校で地学の教員が病休。非常勤教師を探しているから君を推薦した」ということで、県教委から臨時教員免許状（助教諭）を発行してもらい地学の授業をした。中学校教員になってみると、県内の中学校理科担当で地学を専攻した教員が校長1人と私しかいなかった。30歳過ぎた頃から理科関係の資料等の検討とか受験対策用の試験問題の作成とかに地学担当で加わった。教員としての力量を養う上で大いに役立った。

4年生のとき附属中学校で教育実習をした。自分の経験

の範囲だけで授業を考えていたが附属中学校の先生方は違っていた。生徒をより伸ばすにはどうするか、そのために教材研究をし、大学の専門の先生とも議論をして質の高い授業を目指して取り組んでいた。理科の授業でも教科書の観察実験を超えるものを生徒に観察実験させていた。目から鱗で、教育実習期間中に何とか一つでいいから自分で考案した観察実験を生徒にさせたいと思い、夜遅くまで予備実験をした。

当時は、中学校の教育実習は附属中学校と上田中学校で実施されていて、両校の実習生で各科ごとに全体研究が行われていた。理科は附属中学校の当番で、授業者を決めなければならなかった。経緯は忘れたが私が授業することになり、附属中学校に配属になった理科の学生と共同で教材研究をした。植物の光合成の実験で、教科書では3種類の植物でやっていたが、私たちは全種類をすることでより目的が達成される、全種類でやろうと、かなり無茶をした。授業は45分で終わらず時間オーバーした。研究会では担当教官から「時間オーバーは目をつぶって議論しましょう」という提案があったがそれでも喧々諤々と議論をしたこと覚えている。

教育実習が終わったとき、附属中学校の理科の教員が病休に入るので引き続き授業をして欲しいと言われ、たまたま卒業論文を仕上げる目途がついていたので研究室の教授の許可を得て非常勤で授業をすることになった。

卒業後、公立中学校教諭、附属中学校教諭、指導主事、附属中学校副校长、公立中学校校長、総合教育センター次長、公立中学校校長を経て岩手大学教員養成機構教授（退職後は非常勤講師）として農学部・工学部・人文社会学部の教職科目の授業をしている。学生には、学生時代の学修が教員としての頑張りや質を決めるので、読書すること・自己学習すること・卒業論文にしっかり取り組むことを話している。津軽の「じょっぱり」のかなりいい加減な学生時代を反省し、学生が優れた教員になってくれればという思いがあるから。

（昭和45年 甲一類 理科 卒業）

[キャンパス便り]



「何をしたいか」

八木橋 寿海

(学校教育教員養成課程)

小学校コース 4年)

岩手で生まれ、育ててもらった。岩手大学で仲間と学び、そして来年から岩手で、中学校の国語科の教員として勤務することとなる。文字に起こせば、まっすぐな道のようだ。しかし、沢山悩み、回り道をした4年間だった。

「新カリキュラム」と銘打たれた一期生として入学した私たち。教育学部は、「目的学部」として教員になることを強く求められ、先生方のお話からもその感は一層強くなった。教師とは、私たちが物心についてから初めて出会う職業である。自分を導いてくれた「教師」という職業に憧れを感じ、多くが教育学部の門を叩く。しかし、大学で現実を知るのだ。甘い職業ではないと。ふわりとした「あこがれ」を堅固な「決意」にできるかどうか。ここが進路選択の分かれ道なのだと思う。「教員就職率、岩手大が最下位」。昨年末の岩手日報の見出しだ。私の友人も、民間企業や公務員へ就職を決める人たちが多くいた。正直、気持ちは分からなくなはないのだ。やれ教員の仕事はブラックだとマスメディアが散々に報道する。諸先生方に教員の魅力を聞くと、「やりがい」や「子どもの笑顔」といった抽象的な答えしか返ってこない。インターネットは若者を扇動し、海外留学中の友人がインスタグラムで希望を語る。実家のベッドでスマホをいじりながら、自分がとてもつまらない人間のように思えた。岩手しか知らず、学校の世界しか知らない

ない。ベッドからもぞもぞと起き、冴えない頭のまま大学へと自転車を走らせる。

のままではいけないと思った。3年春、何かをつかみたくて、中国へ10日間の短期留学に赴いた。初めて見た中国は、とても大きかった。謎のおもちゃを売る人。道に大きな筆で字を書いている人。沢山の人が様々な仕事をしていた。「国公立に入らなければ。公務員にならなければ。」何かに縛られていた自分にふと気づいた。世界には無限の仕事がある。自分が、「何をしたいか」ではないのか。

そこから一年、将来について悩む日々が続いた。考えて、考えて、そして結局「教師」になった。何度も考えても、自分にはこれしかないのだと思った他者とのコミュニケーションの大切さ。日本古来の学問を分析し、現代との普遍的な価値を見出す力。仲間と困難を乗り越える達成感。4年間の大学生活の中で、自分が学び、成長したことの全ては、教員になることでしか還元されることとなかった。

変わりゆく社会の中で、未来の教え子には「自分で考え、悩む力」を育てていきたい。たとえ結果が変わらなくとも、回り道の途中で得たものは、きっとこれから的人生の支えになってくれると信じている。



教育への志

川上 紗希

(学校教育教員養成課程)

理数教育コース 理科サブコース 4年)

学校教育は、時代が変わりどんなに科学技術が発達しても人間の手によって行われていくといわれている。そうであるならば、教師となる私たちは人工知能AIに取って代わられることのない教育を提供していく責任があるのでないかと考える。私たちだからできる教育とは何だろうかと考えたとき、その答えは人間性を育むところにあるのではないかと考える。この4年間を通して、「教育は人なり」という言葉を様々なところで耳にしてきた。これは、教育の効果は教師という人間の力量によるところが大きく、「子どもたち一人一人の潜在的 possibility を引き出し、心身共に豊かな人づくり」を目指すところに学校教育の本質があることを示唆しているのだと思う。

大学生活史上最も過酷で実りある学びとなったのは、仁王小学校での主免実習と上田中学校での副免実習だ。異校種の実習があったからこそ得られた学びも多かったと感じている。小中学校どちらにおいても重要なこと感じたことは、「分かりたい」「できるようになりたい」「認められたい」という子どもたちの思いに応える学習指導ができることがある。学習を通じて能力を伸ばし、自信をもたせることができる現場の先生方は子どもたちからの信頼を得ていることを感じ、授業力を身に着けること

の大切さを実感した。実習中は常に子どもの姿と学習内容を考え、終わりの見えない教材研究に掛けそなうこともあったが、授業後に「こんな方法で解けた」「この説明が分かりやすかった」と子どもたちから声を掛けてもらったときには、充実感や達成感、安心感が生まれた。しかし、これ以上に胸を打たれた言葉があった。それは、「先生が頑張ってたから、頑張った」という言葉だった。授業や学習指導は難しく、私の至らなさを子どもたちも感じていたと思うが、一緒に考え、学ぼうという私の思いや姿勢が伝わったのかもしれないと思った。そして、子どもたちは、思っている以上に先生の態度や言動を非常によく見ていることにはっとさせられた。社会的に教育的実践力のある教員が求められていることは自明だが、授業力や人間性に満ちた教員が子どもたちからも求められているのだということを痛感し、大学4年間を通して言われてきた教育は人なりという言葉を実感を伴って理解することができたと感じている。

教壇に立ち先生になんでも、子どもたちと共に学び、成長し続けられる人間でありたい。そして、学力のみならず、豊かな人間性を育む学びの場をつくっていくことができる教師になりたい。そのため、来春から新天地で勉学に励み、実践力を高めたいと思う。



大学時代を振り返って

三浦 健

(学校教育教員養成課程 小学校教育コース
英語サブコース 4年)

岩手大学に入学してから4年が経ち、あっという間に卒業の日を迎えていました。大学生活の4年間を振り返ると、充実した日々を送っていましたと実感しています。大学生活の日々を思い返すと、いつも私の周りには素晴らしい仲間や先生方、家族がいました。

私は男子バレーボール部に4年間所属していたのですが、週に5日の部活動の時だけでなく、講義と一緒に受けたり休日も遊んだりするなど多くの時間を部活動の仲間と過ごしました。毎年春と秋に行われる大学リーグでは1部への昇格も2部への降格も経験し、喜びと悔しさの両方を味わいました。楽しいことも苦しいこともありましたが、部活動の仲間は私にとってかけがえのない友人です。4年間、共に過ごしてくれたことに感謝しています。

4年間を通して、私は教育学部の友人にも大きく支えられました。主免の教育実習では、平日だけでなく土日も集まってほぼ毎日のように共に教材研究に励んでいました。初めて経験した教育実習を楽しい気持ちで終えられたのは、同じ学年で実習をした仲間の存在がとても大きかったと感じています。また、4年生になってからは教員採用試験に向けて切磋琢磨した仲間には本当に助けられました。同じ志をもつ仲間と共に勉強に

励んだことで、途中で折れることなく最後までやり抜くことが出来ました。

教育実習でお世話になった先生方や大学の先生方には教師という職業の素晴らしさを学びました。教育実習校の先生方は懇切丁寧に指導してくださったり、実習中は常に励ましたりしてくださいました。先生方のご指導もあり、教師という仕事のやりがいを強く感じ、改めて教師になりたい気持ちが強くなりました。また、大学の先生方には日々の講義や教員採用試験のセミナーなど様々な場面でお世話になりました。先生方から学んだことをこれから教師になった時に生かしていきたいと思います。

振り返ってみると、あっという間の大学生活でしたが、この4年間を大きく支えてくれたのは家族でした。自分が進みたい道をいつも家族のみんなが応援してくれたおかげで学校の先生になるという幼い頃からの夢を実現することができました。今までお世話になった分、これから家族のみんなにたくさん恩返しをしていきたいです。

大学生活での様々な出会いは私を大きく成長させてくれました。これからは小学校の教師としてたくさんの子どもたちや先生方と出会うことになります。これからも人との出会いを大切にしながら自分の道を歩んでいきたいと思います。



「学び続ける教師」

藤森 崇浩

(岩手大学大学院教育学研究科教職実践専攻)

大学を卒業して16年間、出身地である久慈市内外の中学校で勤務していました私は、家族を妻に委ね、盛岡での単身赴任生活を始めた。家具付きの賃貸アパートで久々のひとり暮らしをしながら、岩手大学教職大学院生として学ぶ生活がスタートした。大学で学び、毎週木曜日は所属校の上田中学校で勤務。夜は上田所属の学卒院生と食事をしながら、対話する。金曜日は、リフレクションやゼミ。週末を家族と過ごし、月曜の早朝盛岡に戻る。そうして過ごした2年間。教職経験16年間を振り返りながら学んだ2度目のキャンパスライフを終え、新たな一歩を踏み出すときが近づいてきた。

大学院では様々な講義を受けた。マネジメント、子ども支援、授業力向上、特別支援教育。研究家教員や実務家教員の先生方の有する知見と経験に基づく講義から学ぶことができた。「これを知りていれば、あの時、こうしていたのに。」何度も思ったことか。学んで得られた知見と、過去の実践を結びながら学びを深めることができた。

実習では、現場ではできない経験をさせていただいた。県教委や県の教育センターでの実習では、教育長やセンター所長を始めとする講師先生の話を聞き、教育施策の背景や意味を理解することの大切さを学んだ。初任研にも参加し、初任者の熱意あふれる姿を見て、自分も一層学ばなければという

思いを強くした。宮古教育事務所や宮古市教育委員会での実習では、復興教育について考える機会を得た。「郷土を愛し、その復興・発展を支える人材を育成する」とは、復興教育のみならず、教育の大切な理念だと再認識した。附属小・中学校での子ども支援実習では、「子どもの良さを大切にしながら、支援をする」という見方や考え方を得た。

授業力実習では、上田中学校での授業実践を行った。「学習しつづける力」を高めるため、「生徒が主役の授業」を積み重ねる実践家から大きな刺激を受けた。担当教授の「研究のためではなく子どものために授業をしろ」という言葉は生涯忘れないだろう。実習から、今後一層求められる学習者中心の学びについて考えることができた。

教職大学院の院生室。現職8名学卒10名を1学年とし、合計36名が学んでいる。小・中・高・特支の先生方や学卒院生と、議論や対話を通して学んだことは私の大きな財産となった。

教職人生の折り返し地点にさしかかる頃、岩手大学教職大学院でたくさんの恩師と仲間に出会い、学ぶことができたことは本当に幸せなことだ。2年間の学びを支えてくれた方々への感謝を忘れず、子供たちのために、今後も学び続ける教師として歩んでいきたい。

〔思い出〕—退官される先生方から—

お世話になった教育学部の先生方5名がこの3月にご退任されます。

※藁谷先生は 平成31年3月のご退任です。



高村光太郎の夢

美術教育科

藁 谷 収

大学紛争が終結しそうな、昭和47年岩手大学教育学部特設美術科(特別教科教員養成課程美術)に入学しました。キャンパス内は立看板やデモ、玄関に積まれたバリケードなどが存在し、時には激しい闘争なども見受けられました。特に美術は特美闘争の中心として、激しい歴史があり、学生運動によりカリキュラムの変更など大きな変革を迎えるような時期でした。特美はアトリエを中心に制作空間があり、守衛さんも寄らない、不夜城的な空間でした。大学での思い出といえばこのアトリエでの出来事が当時のフォーカソングとともに蘇ってきます。ここでの体験こそ、ものづくりの原点として体にしみこんでいます。

学部を卒業後、専攻科を修了、昭和53年教育学部美術科の助手として採用され、40年という長きに渡り教員生活を送りました。

全てが手探り状態で、学生たちと、ものづくりの環境(仕事場)を一生懸命作りました。教育学部の事務職員からは、何度も怒られながら、石を使った彫刻制作に必要な、小屋や鍛冶屋などを勝手に作っていました。大学は勉強するところではなく生活するところと、本当に思っていました。やがて大学キャンパスでは狭すぎるようを感じ始め、玉山の石切り場でのキャンプ生活へと発展していきました。このような活動が日本を代表するような彫刻シンポジウムとして40年数年続くこととなっています。卒業生は先生から講義を受けた記憶は無いが、何時も小屋を作り、石を運んでいることしか思い出せないと、よく言われていました。

教員になって、幾度も大学改革の波は押し寄せ、結果的には特美は解体され、戦後全国でも珍しい県立の美術学校の意志をつなぐことはできませんでした。このことは教員生活の中でどうしても悔やまれてなりません。高村光太郎が、講演会で話された「世界でも美の中心になるところは、そうたくさんはないが、日本もその一つであり、僕は、岩手は日本でも素晴らしい日の中心地だとおもっている。必ず岩手の風土の中から私の夢を実現してくれる人が出てくるとおもっている。」この思いは、これから後の後輩に託すことになります。



幼児教育の重要性

国語教育科

大 野 真 男

1983年の春、岩手大学に着任して以来、留学生も含めて実に多くの学生の皆さんと学び合うことができ、研究面においても一点の悔いを残すことなく、学内外の種々の業務も多様に体験させていただくことができ、一言でいえば、たいへん楽しい教員生活を送らせていただきました。別けても、定年退職前の3年間、附属幼稚園長を拝命できることはたいへん幸せなことでした。専攻が教科専門であり、幼児教育の世界とは隔たった立場おりましたので、当初は戸惑いやためらいがありましたが、幼児教育の重要性にはすぐに気づくことができました。

子どもの一生の幸せを決定するのは幼児教育であるとするペリーー就学前プロジェクトの結果に、世界中が注目していたというタイミングでもありました。日本でも、幼保一本化の一環として、保育園や子ども園にも託児機能だけでなく幼児教育を義務づけるという教育要領・保育指針の改定の形で反映してきました。3歳以上の幼児教育無償化の流れも、選挙対策としてはともかく、このような大きな世界的潮流の中で起こったことです。

新しい幼稚園教育要領でも、育みたい資質・能力について「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」のように、この二つには「基礎」が付けられていますが「学びに向かう力、人間性等」はそのままです。むしろ、教科が目白押しの小学校以降の教育段階では、「人間性」に代表されるような非認知能力(今の教育のキーワードになっていますね)を育む余裕がどこで確保されているのか心配になってしまいます。

初等教育には就学前教育も含まれます。義務教育で育まれる「知識及び技能」「思考力、判断力・表現力」の「基礎」を幼児教育が担っていることを忘れてはなりません。「基礎」とは何でしょう。まさに芽を出し、枝を伸ばし、葉を繁らせ、花を咲かせ、実をみのらせる、その根っこに当たる力でしょう。豊かな遊びを通して、そんな力を身につけていく幼稚園の子どもたち、それを暖かく育む幼稚園の先生方。30年以上にわたり教育学部に奉職してきた最後のタイミングで、幼稚園という教育の原点に立ち会うことができたことは何よりの幸せでした。

しかしながら心配ごとも残ってしまいました。新たな課程認定のプロセスで、今後、幼稚園免許を出せなくなることが懸念されているのです。根っここの草からは、花も咲かなければ、実も生りません。この危機的状況をどのように教育学部が克服していくのか、卒業生と一緒に見守っていきたいと思います。



定年を迎えて

社会科教育科

遠 藤 匡 俊

間もなく3月をもって岩手大学を定年退職することになりました。大学の研究費で購入した本を図書館へ返したり、研究室内の荷物の整理を少しづつ始めています。10～15冊ほどの本を抱えて図書館への帰り道や、歴代の地理学研究室3年生の全国巡査報告書などを整理していると、赴任して以来のことがいろいろと思い出されます。

なかなか大学への就職ができずに、諦めようとしたときに、縁あって岩手大学教育学部に採用していただきました。人文地理学を専門分野として講義、演習、実習などを担当してきましたが、33歳で赴任してきたころには、勉強不足と経験不足のために、どれも不十分なものであったように思います。少しづつ経験を積み、自分の子どもの成長過程と重ね合わせて、児童・生徒の発達段階を想定して、人文地理学分野の講義内容を組み立てるようになりました。余談として話すことが多いのですが、幼稚園児や小学校低学年生の言動や反応、高学年になったときのこと等を、講義のなかに取り入れています。

研究では、これまで近世アイヌの集落や文化をテーマとしてきました。6年ほど前に御所野縄文遺跡や三内丸山遺跡で、縄文時代の竪穴住居跡を見る機会がありました。一緒に訪ねた小学校1年生の娘からは「～はどうなってるの? アイヌ君は? どうして?」という素朴な疑問がいろいろ出されました。これが、1800年代中葉のアイヌ集落と縄文時代の集落の比較という、私にとって新たな研究テーマを始めるきっかけとなりました。東日本大震災を経験してからは、災害について手掛けてみたいという思いが強まり、1822年の有珠山噴火とアイヌの人々のかかわりについての研究に取り掛かりました。昨年は、はじめてロシア国のサハリンを訪れて史料調査をし、1800年代の樺太アイヌと千島アイヌの分析を進めています。専門領域ではありませんが、最近は興味に従って、素人ながらもいろいろと手を出すようになりました。定年によって職場を去ることになりますが、研究は何とか継続できればと思っています。

岩手大学に赴任して以来、とくに学生の皆さんたちには、日ごろの大学での仕事において、また、岩手大学を会場として開催された大きな学術大会などにおいて、いろいろな場面で協力していただき、助けられてきました。おかげさまで無事に定年を迎えることができそうです。心より御礼申し上げます。



岩手大学での教員生活を振り返って

理科教育科

土 谷 信 高

岩手大学に赴任したのは1994年の8月でした。それから25年半ほど在籍したことになりますが、その間にやって来た研究は、大陸地殻の主要な構成物である花崗岩の形成過程と地球の歴史における位置づけを解明するというものです。まず卒業研究の題材として、「沈み込んだ海洋地殻が直接部分溶融して花崗岩質マグマが形成される現象」に注目し、北上山地の前期白亜紀(約1億2000万年前)の火成活動を総合的に研究することに取り組みました。当時の学生諸君は大変真面目であり、未調査であった花崗岩体の調査を次々にこなしてくれました。それらの努力によって、東北日本の前期白亜紀火成活動において活動的な海嶺の沈み込みがあり、その後の沈み込み帯の温度低下によって花崗岩類の化学組成が変化したことを明らかにすることができました。

岩手大学での研究生活に慣れて来た頃から、学生達に日本ではできない地質学・岩石学をやらせてみたいと考えるようになりました。2007年には新潟大学のオマーン調査に同行する機会を得、過去の海洋プレート層序がそのまま大陸にのし上げている地質体(オフィオライト)を調査しました。それによって、オフィオライト中に希に産出する花崗岩類の研究は手薄であり、重要な研究テーマであることに気がつきました。そのような観点から、2008年度から2018年度までに述べ25名の学生諸君に参加してもらい、オマーン・オフィオライト中の花崗岩類の研究を目的とした計10回の調査を行いました。これによって、オフィオライト衝上開始期に形成される花崗岩類の特徴を明らかにするという研究成果を得ることができました。

さらに2011年度から、九州大学比較社会分化研究院との共同研究で、最近の年代学の主流であるジルコンを用いたU-Pb年代の測定を開始しました。ここでも学生諸君の努力によって、北上山地の前期白亜紀花崗岩類の年代学的特徴を明らかにしたばかりでなく、石炭紀末期の3億年前の花崗岩体、および日本最古となるカンブリア紀末期の5億年前の花崗岩体の発見というおまけがつきました。以上の様な大きな成果を挙げることができたのは、私のわがままに付き合ってくれた学生諸君の頑張りと、分析機械を提供して研究に協力してくれた多くの仲間たちのおかげです。退職後もさらに精進を重ね、地球史における大陸地殻の形成機構の解明に少しでも近づくことが目標です。



越境としての30年

学校教育科

塚 野 弘 明



価値の逆転

技術教育科

吉 田 等 明

教育学部にお世話になって30年が経ちました。現在は学校教育科の心理学に所属していますが、在任期間のほとんどを附属の教育実践総合センターで過ごしました。このセンターは、教育実践、学校臨床、地域連携など、時代の新しい課題への推進役を担う施設でしたので、センターの専任教員は、専門以外の未知の領域に「越境」することが常に求められました。もっとも大学教員としては、自分のスタイルを変えずに、環境を変える道を選ぶこともできたと思います。でも、岩手の水がよほど合ったのでしょうか、私は環境に合わせる道を選びました。結果として、30年の長きに亘って学部にお世話になり、岩手の地に骨を埋めることになったのです。

ところが、未知の領域に踏み出すということは、そう簡単なことではありませんでした。同じ言葉でも意味が全く通じなかったり、その意義を理解できなかったり、拠って立つ暗黙の前提が異なるために、まさしく世界が違うとしかいよいのないことが頻繁に生じました。例えていえば、幼児教育と小学校教育で「遊び」や「活動」の意味が全く異なることと似ています。また当時の学部は、研究以外のことは大学の行うことではないという考え方方が根強かったので、実践センターの取り組みがなかなか評価してもらえない時期もありました。つまり、他領域へ越境しようとすると、自他双方から批判を受けるという困難に直面することになるのです。ただ現在では、実践センターの先進的な取り組みが、学部全体の教育、研究、事業として恒常的に行われるようになっています。

本年度で私が慣れ親しんだ実践センターは幕を閉じますが、来年度からは学校安全学という領域を加えて再出発することが決まっています。まさしく、こうした新しい課題への挑戦こそがセンターの真骨頂といえるでしょう。

フィンランドの心理学者エンゲストロームは、「組織の内部矛盾を発展的に解消し、文化的・歴史的に新しい活動形態を創造するためには他の組織との『越境』が契機となる」と述べています。学部やセンターの形は変わっても、この「越境」の精神だけは持ち続けてほしいと思います。

ある時を境にして「善が悪に」そして「悪が善に」価値が逆転するということはあるものです。私の学生時代と今とでは、随分と大学も変わりました。

歴史では、2020年の大河ドラマの主人公になるなど明智光秀が再評価されてきています。本来の侍なら主君に仕えるのが最重要で、裏切るなど到底許されることではなかったはずですが。近頃のサッカーだと侍ジャパンですが、監督を主君と敬っているように見えません。主君との主従関係が無くとも「侍」というようになったらしい。また最近の中国ドラマでは、三国志の勝ち組である司馬懿が再評価されているようです。日本でも吉田松陰は司馬懿を臣下として最低であるといっていました。司馬懿は魏や晋の礎を築いた重要人物で、三国志の小説の方で天才と名高い諸葛亮孔明を止めた切れ者なのですが、主君に仕えるような型にはまったことはできない人だったようです。それがようやく再評価されてきているようです。

世界的に有名なモーツアルトの歌劇「魔笛」では、火の試練・水の試練を乗り越えた先で、夜の女王が善から悪へ、ザラストロが悪から善へと逆転が起こります。昔の教育では、プログラミングは将来機械が自動的に行うので不要であるとさえ言う人たちがおりました。しかし今や日本は世界に後れを取っており、小学校からプログラミングを必修にするという時代になりました。また機械学習の分野では、人工ニューラルネットワークを利用することは時代遅れとまで言われていたことがあります。しかし現在AIブームが到来し、ディープラーニングの基礎として人工ニューラルネットワークが見直されています。私の研究室では昔からこの人工ニューラルネットワークの応用を研究してきたのですが、アンチ機械学習の装置として学習しない上に時々刻々と情報を失っていくという変わりものを扱っています。この方が良い場合もあるのですが、はたして世界から認められる日は来るでしょうか？

学生の指導上で気づいたことは、自分は文系だから数学はできないとか数式は分からないと避けてしまっているケースがありました。数学はツールに過ぎないので、文系でも理系でも使えると便利だと思うのですが。文系だ理系だと固定観念を持ち自分を狭い世界に閉じ込めてしまうのは受験の影響でしょうか。教育でも価値の逆転が起こることを期待しております。

〔事務局だより〕

令和元年度の北桐会は、6月に開催された評議員会において、小笠原義文会長から岩手大学創立70周年の協力体制の説明がなされました。当日は学長と卒業生・修了生との懇談会、式典、講演会、懇親会と続き、特に講演会は教育学部卒業生の若竹千佐子さんの対談形式の講演で大いに盛り上りました。

小笠原会長（連合同窓会会長）は70周年を記念として、桐の木の植樹を呼びかけ、キャンパス内3カ所に学長はじめ連合の関係者による記念の桐の木が植えられました。また、新入生にお配りしています学生歌（CD）について、再来年度からは配布を終了し、大学として整備することになりました。

北桐会事務局の事務をされています澤田幸子さんは、今年度一杯で退職されることになりました。長い間のご苦労に心から感謝を申し上げます。新年度からは新しく事務を採られる方がいらっしゃいます。

教育学部は、教員養成のあり方についても新しい局面を迎えることになりますが、大学全体での議論が何よりも必要な時期で、小学校コースの充実はもとより、中学校コースの存続を必ず守りたいところです。

支部活動におかれましては、日頃より活動の報告を頂いているところですが、各支部におきまして困っていることなどがありましたなら、ご相談いただきますようお願いいたします。

連合の会議などでは、学部を超えた連携のあり方などの提案もされ始めています。

岩手大学は、イーハトーブ基金を設立し、新たな基金活動を展開いたします。教育学部におきましては特定基金（仮称 教育学部基金）として、教授会等で審議が進められています。これらの内容につきましては、7月に開催予定の評議委員会で北桐会としての広報の仕方についてご案内させていただきます。

追伸、次回の卒業生・修了生と学長との懇談会（第13回）は札幌会場で開催されます。オリンピックの関係で9月の開催となりました。北海道にお住いの方々にご案内いたしますので、ご出席いただきますようお願い申し上げます。

日時：9月19日（土）

会場：札幌市 ANAクラウンプラザホテル札幌

連絡とお願い

- 同窓会活動へのご意見ご提案をお待ちいたしております。
- 新たな卒業生・修了生の情報と、会員の住所変更・改姓や会報の届いていない会員等のご連絡は、本誌折り込みはがきを利用して必ず事務局へご連絡下さい。
- 恩師や会員のご不幸には弔電をお届けすることになっております。もし訃報が入りましたら出来るだけ速やかに事務局までご連絡下さい。
- 発行協力費が寄せられています。ご協力いただきました会員の皆様に厚く感謝申しあげますとともに、何卒引き続きご協力の程お願いいたします。
- 同封されました岩手大学同窓会連合会報をご覧下さい。
- 新たに支部を設立する地域がございましたら、本部までお問い合わせください。名簿等の資料と、設立準備金を提供いたします。

（藁谷）

編集後記

おかげさまで「北桐」59号が完成し、会員の皆様にお届けすることができます。お忙しい中、快くご執筆・ご協力いただいた方々に、誌上より厚く御礼申し上げます。

今回の特集は「全国へ羽ばたく岩手の音楽」と題し、近年合唱・吹奏楽において全国的な活躍が特にめざましい学校を指導されている同窓生の方々にご寄稿いただきました。大学時代や初任地における音楽とのかかわりを原点としながら、日々児童生徒と一緒にになってよりよいものを目指そうとする先生方の熱い思いが伝わってきました。この岩手大学から今後も更に多くの分野において卒業生が活躍されることを願ってやみません。

さて、今年度末をもって、岩手大学教育学部同窓会「北桐会」の本部事務を長らく務めてこられた澤田幸子さんがご退職されることとなりました。澤田さんが北桐会に携わられたのは平成元年から。まさに「平成の時代」を同窓会の歴史とともに歩んでこられました。この『北桐』の編集にあたっても、澤田さんから毎年多大なお力添えをいただきました。これまでのご尽力にあらためて深く感謝申し上げます。

北桐は今後も、皆様のご協力を支えに、誌面の充実に尽くして参りたいと思います。なお、会員の皆様にご協力いただいた発行・発送協力費は、発送経費の一部に充当させていただいております。引き続き、ご理解とご協力をお願いいたします。

最後に、会員の皆様のますますのご健康とご活躍を、編集委員一同お祈りし、編集後記といたします。

(U・J)

北 桐

第59号

令和2年3月17日発行

●発行 岩手大学教育学部同窓会（北桐会）

会長 小笠原 義文

〒020-8550 盛岡市上田三丁目18-33

TEL・FAX 019-621-6618

<http://www.edu.iwate-u.ac.jp/hokutou/>

hokutou@iwate-u.ac.jp

●編集 北桐編集委員会

委員長 上田 淳悟

●印刷 (株) 杜陵印刷

〒020-0122 盛岡市みたけ二丁目22-50

TEL 019-641-8000

FAX 019-641-8085